

## A Little Bit Of Mexico

サンフランシスコにあったメキシカン・バー

ジョージ  
カックル



もう四十年ほど前のことだ。サンフランシスコの有名なメキシコ地区、ミッジョンストリートに「ラ・テラサ」というメキシコのレストラン・バーがあった。大きな看板や日除け、建物の正面は一部の隙もなく壁画が描かれ、華やかだった。とはいえ、僕はずっと行きたいと思いつながら、ためらっていた。外にはいつも若いメキシコ系のいかつい男たちがたむろし、入り口にはガードマンが立っていたからだ。

しかし、ある土曜の夜、僕は思い切って足を運んだ。片言のスペイン語でガードマンに挨拶を口にし、ドアを開けた。店内はかなり暗く、メキシコ音楽が大音量で流れていた。右側に長い木製のカウンター、左側のバーの椅子の後ろには腰の高さの壁があり、その向こうにダイニングエリアが広がっていた。壁沿いにテーブルが並んでおり、中央部分はテーブルや椅子がなく、後にダンスフロアだと気付いた。奥の壁は黒く塗られ、ブラックライトで、メキシコの田舎の風景が浮かび上がった。まるで六〇年代のサイケデリックな雰囲気。土曜ということもあり、店内はメキシコ系の日雇い労働者が埋め尽くし、僕のような一見、白人のアメリカ人は一人もいなかった。バーには女性の姿は見当たらず、ダイニングエリアには数組の女性たちが座っていた。僕は唯一空いていたカウンターの席に座った。数秒後、バーテンダーが近づいてきて何かスペイン語で言ったが、ひと言も聞き取れなかつ

た。高校でスペイン語でなくフランス語を学んだことを悔やんだが、唯一知っているのは「ドス・セルベサ・ボル・ファポール（ビール二本お願いします）」くらいだ。その後、バーテンダーが僕にコ罗纳ビールを渡してやってきた頃、ほかの客たちの集中的な視線に気づいた。最初は、人種が違うからかと思ったが、どうやら違う。気づいたら、誰もメキシコのビールではなく、全員がバドワイザーを飲んでいった。僕はその場に溶け込もうとしていたのに、まるで野生の馬の群れに迷い込んだロバのようだった。僕は焦って急いでビールを飲み干して店をあとにした。

冷たいサンフランシスコの夜を歩きながら、あの日雇い労働者たちは、アメリカに出稼ぎにきたメキシコ人たちではないかと思つた。サンフランシスコでは、彼らはペンキ屋、大工、食器洗い係として働いている。ほかの農村地域なら農作業の労働者だっただろう。彼らはメキシコのテキサスやビールを飲みに来たのではなく、アメリカン・エクスプレス全体を求めてきたのかもしれない。輸入品であるメキシコのビールより、アメリカのビールのほうが多分安いのだろう。アメリカでは多くの人が自分で家を塗るが、ペンキ屋が必要な場合は、地元ホームセンターに行けば、メキシコ系の日雇い労働者たちが待っている。車を止めて「ペンキ屋？」と呼びかけると、ペンキを塗れるメキシコ人労働者たちがトラックの後ろに飛び乗ってくる。大工も同様だ。こういった人たちが「ラ・テラサ」のようなバーに通う客たちだろう。

メキシカン・バーの場違いな雰囲気打ちのめされた僕だが、数ヶ月後、やっと勇気を出した。愚かなグリニコ（ヒスパニック系ではない人、特にアメリカ人に対する侮蔑的な言葉）にはなるまいと、心に決

めて店に入ると、迷わずウイスキーを注文した。これが私の「ラ・テラサ」のスタートだった。ひとり暮らしの手持ち無沙汰を埋めるために「ラ・テラサ」に行き、カウンターに座って誰とも言葉を交わさず、ただシーンを楽しんでいた。メキシコ人たちは店に入ると複雑な握手の儀式を交わし、最後に拳を軽くぶつける。誰も僕には話しかけない。数ヶ月して、僕を認識するようになってくれたが、目があっても単なるうなずきに終わっていた。

「ラ・テラサ」は音楽がよく流れていた。月曜から水曜日まではマリアッチの演奏者たちがテーブルを回って、チップをもらいながらリクエストに応えた。そして金曜から日曜日はステージで生演奏があり、それは「音楽ノルテーニョ」と呼ばれる、ポルカとメキシコの民俗音楽の混ざったスタイルだった。バンドはアコーディオン、ドラム、時にはメキシコの深みのあるベースギター、そしてもちろん力強い歌声を持ったボーカリスト（多くはアコーディオニスト）で構成されていた。こうした夜には、メキシコ人の女性たちが現れ、テーブルでドリンクを飲みながらカウンターの男性たちにダンスに誘われるのを待っていた。僕が見た限り、女性がバーカウンターに座っているのは見たことは一度もなく、そこは完全に男性のエリアだった。

ある夜、隣に座った小柄で日焼けしたメキシコ系の男性がフランネルシャツをきっちりボタンを閉め、静かにウイスキーのショットを飲んでいた。彼はグラスをじっと見つめて、長い年月の思い出にふけているように見えた。突然、彼はグラスのウイスキーを一気に飲み干し、席を立てて女性たちが座っているエリアに向かったかと思うと、一人の若い女性に近づき、ダンスを申し込んだ。ダンス

スフロアで一曲踊り終わると彼女をテーブルに促し、何も言わずに彼もカウンターに戻った。そしてバーテンダーにもう一杯ウイスキーを頼んだ。ウイスキーは彼の勇気の源なのだ。そのボトルは確か、オールドロウだった。僕はそれを見て、自分も勇気を出してウイスキーをもう一杯注文した。誰もダンスには誘っていないけどね。

「ラ・テラサ」に通い始めてから二年以上が経ったある日、新年の直後に一杯飲みうとういつも通り店に入り、カウンターに座ってウイスキーを注文すると、バーテンダーはおそらくこう言った、「新年おめでとう」。彼は手を差し出して握手を求めてきた。そんなことは初めてだったので驚きながら握手を返した。あの複雑なメキシコ式の握手だ。軽く拳をぶつけて、笑顔で「大丈夫だよ」と言いたげに僕を指さした。

それからずっと誰とも話すことなく、話しかけられることもなかったが、僕は「ラ・テラサ」で許される数少ないグリンゴの一人として、ウイスキーを注文し、部屋の向こうから響く音楽を楽しみ続けた。

ジョージカックル ラジオ・パソナリティ。一九五六年鎌倉生まれ。幼少時代を日本、テキサス、韓国で過ごす。インドをはじめ世界各国を放浪し、十八年に及ぶサンフランシスコ生活を経て拠点を日本に移す。アメリカ、日本で多種多様な職業を経験したのち、音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家、サッファードとして多忙な日々を送る。現在はインタRFMや湘南ビーチFMで自身の音楽番組を持つ。著書に『ジョージカックルのWELL WELL WELL スローでメロウな人生論』、『ジョージカックルの鎌倉ガイド』など多数。雑誌『ザ・サッファーズ・ジャーナル日本版』のマネージング・ディレクターを務める。